

教育工学 (ET) 研究会への誘い

國宗 永佳
千葉工業大学



1. はじめに

本稿では教育工学研究会（以下、ET 研）の概要と、同研究会における近年の発表の傾向について紹介する。ET 研では学習支援に様々な情報技術を活用した研究も多く発表されており、情報・システムソサイエティ会員にとって何らかの関わりがあると考えている。本稿が読者の皆様にとって、ET 研にご興味をお持ちいただくきっかけとなれば幸いである。

2. ET 研の概要

1967年に設立されたET研（設立当初は「教育技術研究会」、1985年に現名称に改称）は、本邦における教育工学に関する学会・研究会として最初期に設立された[1], [2]。ET研のWebページ[3]では同研究会を、「教育工学、および、関連する理論・システム・実践まで幅広い研究発表・議論を行っております」と紹介している。

ET研の特徴の1つに、年間の開催回数の多さ（例年9回）がある。本ソサイエティのET研を除く22研究会の2022年度の平均開催回数は4.9回であり、ソサイエティ内ではET研が最多であった。毎年、北は北海道・東北地区から南は九州・沖縄地区まで全国各地で研究会を開催し、各地で教育工学分野に興味を持つ方が参加しやすい状況を作っている。2020～2021年度には主にオンラインで開催していたが、2022年度からはハイブリッド形式による開催に移行しつつある。

ほかにも教育工学分野を活性化するための方策として、若手研究者育成や研究会における情報保障にも取り組んでいる[4]。また、論文誌に

おいて特集号を定期的に企画しており、2023年には和文・英文の両誌にて「変容する社会における持続発展的な学びのための教育工学論文特集」(vol.J106-D, no.2)と“Special Section on Educational Technologies for Sustainable and Expansive Learning” (vol.E106-D, no.2)が発刊された。

3. 最近の発表の傾向

清水[2]は、1993～2015年のET研における発表について分析した。本稿では、2016～2022年度の7年間に発表された全727件のうち、発表申込システムに和文の題名と概要が登録されていた571件について分析した結果を示し、近年の傾向について紹介する。

文献[2]でも着目していた「学習支援」と「eラーニング」(e-Learningなども含む)を題名か概要に含む発表件数の年度ごとの割合を図1に示す。この7年間で「学習支援」が含まれる発表は69件（平均12.1%）、「eラーニング」が含まれる発表は25件（平均4.4%）で、いずれも2015年以前に比べて割合が低くなっているものの、毎年関連する発表が行われている。

7年間の発表概要から作成したワードクラウドを図2に示し、ET研の特徴を概観する。7年

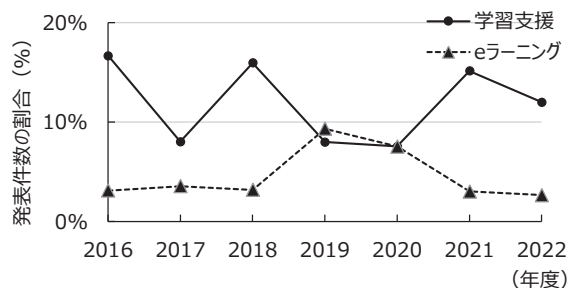


図 1. 学習支援と eラーニングを含む発表件数の割合

